

親子における性役割行動の認知

大 瀧 ミドリ*・近 藤 里 恵**

(平成2年10月31日受理)

要 旨

本研究の目的は、性役割行動の認知における発達の変化と子どもと両親の認知の関連を明らかにすることにある。

対象は、小学生(4年生)から高校生(2年生)までの719名(男子371名、女子348名)と彼等の両親である。

調査内容は、女性の性役割行動に関する31項目と男性の性役割行動に関する31項目からなっている。それぞれの項目に関して7段階評定を求める。

結果は、以下の通りである。

1. 性役割行動に関して「対等平等」「家庭志向」「不平等」の3因子を得る。
2. 男子・女子ともに小学生よりも中学生・高校生の方が、男女の役割分化が明確である。
3. 女性の性役割行動に関しては、中学生・高校生に有意な男女差が認められる。男性の性役割行動に関しては、高校生にのみ有意な男女差が認められる。
4. 高校の男子と両親よりも女子と両親の間に有意な相関関係がある。

KEY WORDS

social-role cognition

役割認知

women's social-role

女性の生き方

men's social-role

男性の生き方

children and their parents

親子

1. はじめに

先¹⁾に高校生とその両親を対象とし、子・父・母のいずれも男性および女性の生き方として、対等平等(対異性との関係において当該性が家庭・社会・知的・職業などの広い分野において対等平等に生きること、つまり、男女相互に多彩な役割を認め、相互にその責任が問われるような生き方)の生き方が多くの賛成を得ている。

しかし、それぞれの生き方における男女差に注目した場合は、対等平等の生き方は男性に、生活の中心を家庭におく家庭志向の生き方と対異性との関係で当該性のものが劣っているという前提に立つ不平等の生き方は、女性の生き方として肯定されやすいことが明らかとなる。

性役割行動における親子のずれについては、女性の生き方には女子と母親の認知には有意差

* 生活・健康系教育講座

** 長野県長門町立大門小学校

はないが、父親は女子よりも伝統的な家庭志向の生き方を良しとする傾向が顕著であり、異性の親とのずれが大きくなっている。一方、男子の場合は女性の生き方について、対等平等の考え方が低く、家庭志向の方が高く、両親のいずれよりも有意に伝統的な生き方を支持している。また、男性の生き方についてみると、女子と父親の間には有意差は見られず。むしろ、母親との間に有意差があり、女子は男性の生き方として家庭志向の生き方を母親よりも認めている。一方、男子よりも両親の方が男性の生き方として対等平等の生き方を高く肯定しており、男子は両親よりも保守的な考え方をしている。このように女性と男性の生き方のいずれにおいても女子は父親や母親よりも非伝統的な考え方をしているが、男子は女性と男性の生き方のいずれにおいても父親や母親よりも保守的な考え方をしていることが明らかになる。

高校生がよしとする女性と男性の生き方は、性役割の獲得過程とパラレルな関係にあることが仮定される。そこで、本研究では、小学生や中学生を新たに対象とし、女性と男性の生き方としてどのような生き方を肯定するかを明らかにすることによって性役割行動の認知における発達の変化を明らかにする。また、高校生と両親の考え方にはプラスの有意な相関が認められたが、親のもつ価値は、日常的な生活の共有体験を介して親から子どもに伝えられることが考えられる。それゆえ、高校段階の子どもよりも親との生活の共有が多い、小・中学生と両親の間に高校生の場合よりも高い相関を仮定することができる。そこで、この点についても検討する。

2. 方 法

1. 対 象

長野市内の公立小学校・中学校・高校に在籍する児童・生徒計 719 名とその両親である。分析対象とした児童・生徒の詳細は以下の通りである。

小学校4年生	217名	(男子 117名, 女子 100名)
6年生	207名	(男子 108名, 女子 99名)
中学校2年生	295名	(男子 146名, 女子 149名)
高校2年生	177名	(男子 48名, 女子 129名)
計	719名	

なお、回収率は小学生および中学生の場合は 100%、高校生は 70%、両親は 62%である。

2. 方 法

鹿内ら²⁾は、女性の社会的役割に関する態度を評定する尺度を考察している。本研究ではそれらを男性の役割として反転させることにより、男性の生き方における望ましさを測る尺度として使用し、男女の性役割行動の認知に関する発達について明らかにするため小学4年生から高校2年生までを調査対象とする。しかし、小学生にとっては調査項目の内容に難しいものがあるため、本来の項目の意味を変更しないように配慮した上で、平易な表現にする。しかし、そのような手段によっても項目の意味の理解が難しいものが8項目あったためそれらは今回の調査から除く。

調査票は、小学生票と中・高校生・両親票の2種類で構成されている。

小学生には各項目について、「そうおもう」から「そうおもわない」までの5段階評定を求め、

中・高校生・両親には、「非常に賛成」から「非常に反対」までの7段階評定を求める。ただし、小学生の結果は、他の学校段階や両親との比較を行うため、7段階評定に換算する。

高校生とその両親に対する調査は1987年9～10月、小・中学生とその両親に対する調査は1989年5～6月に行う。小・中・高校生の調査は、クラス担当教師の指導のもとで学級内で行う。両親については、児童・生徒が調査票を家庭に持ち帰り、後日クラス担当教師に提出する留置法により行う。

3. 結果と考察

1. 因子分析

評定値として7段階評定の「非常に当てはまる」から「非常に当てはまらない」までにそれぞれ7点から1点までを配し、中・高校生の生き方に関する評定結果に基づいて因子分析を行い、次の3因子を抽出する。因子として弁別力をもつ項目は、31項目中21項目である。各因子に含まれる項目は、鹿内らのものとはかなり異っている。各因子に含まれる項目を表1に示す。

表1 女性の役割行動の因子別項目と負荷量

	項目の内容	負荷量
対 等 平 等	I-1. 女性は何らかの社会参加をつうじて、家庭の外にある世界と積極的なつながりを持つべきである	0.62
	2. 自分の能力や可能性を社会のために役立たせることは、女性としての義務の一つである	0.57
	3. 男性と対等に議論できるような知識や思考力が女性にも必要である	0.53
	4. 自分が一人の職業人として生きているという自覚は、男女を問わず大きな喜びである	0.53
	5. 仕事に打ち込んでいる女性は魅力的である	0.50
	6. 家庭が円満かどうかは、主婦だけでなく、夫、子ども、両親など家族全員が責任を負うべきことである	0.44
	7. 女性が家庭にとじこもり、そこでのささやかな幸福に甘んじていれば、社会からとり残されるだけである	0.42
	8. 男の子にも女の子にも、平等に家事を手伝わせるべきである	0.42
	9. 女性は近隣の出来事や子どもの生活環境を守るため地域活動の原動力とならなければならない	0.41
家 庭 志 向	II-1. 女性が外で働く場合は、家庭に迷惑や不都合をかけない範囲にしておくべきだ	0.64
	2. 女性は仕事に成功しても、女性本来の喜びである愛情や献身の生活が犠牲となるならば、真の幸福を味わうことはできない	0.57
	3. 女性は仕事を持っているからといって、自分の夫に掃除や皿洗いなどだんじてさせるべきではない	0.55
	4. 家庭がみんなの憩いの場とならなければ、主婦としては失格である	0.45
	5. 女性が仕事を持てば、夫や子どもたちは、各人の責任を自覚するようになり、かえって家庭に望ましい影響をあたえる	-0.42
	6. 良い妻、良い母親になることが女性にとって人生最大の目的である	0.41
	7. 女性にとって、良き妻、良き母親として生きることよりも、一人の人間として生きることの方がもっと大切である	-0.41
不 平 等	III-1. 女性は専門的知識の必要な仕事には適していない	0.65
	2. 女性は政治などに口出しすべきではない	0.59
	3. 家庭のことに真剣に取り組んでいれば、主婦は社会や政治の動きなどまったく気にならないはずである	0.54
	4. 女性には、家庭を守り子どもを育てること以上に、重要な役割は期待されていない	0.49
	5. もともと女性は男性に比べ、仕事に必要な能力が劣っている	0.48
	6. 婦人の地位向上などの女性運動に積極的な関心を持つよりも、主婦としての仕事に専念したほうが良い	0.48

各因子に含まれる項目構成は、既報³⁾と多少異なっているが、各因子の表示するものは基本的な違いはみられない。第1因子には、「積極的な社会参加が必要」「男性と対等な知識や能力が必要」「職業につくことは男女を問わず必要」「家庭の安定は家族全員の責任」「男女の別無く家事参加が必要」などの項目が含まれている。いわゆる、女性の生き方を男性と別のものとしてとらえず、男女の別無く生きることをよしとしているため、「対等平等」の因子とする。第2因子には、「家族に迷惑をかけない範囲の就労」「愛情と献身が女性本来の生活」「家事は女性の仕事」「家族への憩いの提供者」「良妻賢母」などの生き方を示す項目が含まれている。これらの生き方はすべて、女性の生き方は男性とは異なるとした明確な性役割行動に立って肯定されるものである。女性の生きる場所を家庭に限定しているため「家庭志向」の因子とする。この因子に含まれる5と7の項目の因子負荷量がマイナスであるため、以降の分析では評定点を逆配点にする。第3因子には、「女性は専門職に不適」「政治的無関心」「家事・育児の重視」「能力的蔑視」「社会的活動よりも家庭重視」などの項目が含まれている。これらはすべて、女性は男性よりも能力などが劣るとの前提に立って肯定される生き方であるため、「不平等」の因子とする。

これらの女性の生き方に関する各因子を、男性の生き方にも適用する。各因子の意味は、男性の生き方に適用した場合も同じである。

女性の生き方の場合には、対等平等の生き方は非伝統的な生き方を示し、家庭志向と不平等の生き方は、伝統的な生き方を示すことになる。しかし、これらの因子を男性の生き方とした場合には、対等平等も家庭志向も不平等のいずれも従来の男性の生き方に比較すれば、非伝統的なものといえる。

以下、発達的变化および親子の関連について検討する。

2. 女性および男性の生き方の認知における発達

(1) 女子について

女子が、女性および男性の生き方についてどのような生き方を「よし」とし、またどのような生き方を「あし」とするかについてみたのが表2である。

表2 女性と男性における生き方 (女子)

		女性の生き方		男性の生き方		有意差
		平均	SD	平均	SD	
4年 (100人)	対等平等	5.3	0.8	5.1	0.9	
	家庭志向	4.6	0.8	4.1	0.7	***
	不平等	4.0	0.8	3.3	0.9	***
6年 (99人)	対等平等	5.4	0.6	5.3	0.7	
	家庭志向	4.2	0.8	4.0	0.6	*
	不平等	3.7	0.9	3.0	0.9	***
中学生 (149人)	対等平等	5.1	0.7	5.3	0.8	***
	家庭志向	4.6	0.6	4.5	0.7	*
	不平等	3.2	0.9	3.1	1.0	
高校生 (129人)	対等平等	5.5	0.7	5.7	0.7	**
	家庭志向	4.5	0.7	4.2	0.6	***
	不平等	2.6	0.9	2.4	0.7	*

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

女性の生き方として、いずれの学年においても最も多くの賛成を得ているものは、対等平等の生き方であり、最も受け入れられないのが不平等の生き方である。家庭志向の生き方は、どちらかと言えば賛成とされ、必ずしも女性の生き方として否定されていない。それぞれの生き方について学年間の差異をみると、対等平等の生き方は中学生では、小学生や高校生に比較して有意に低い。家庭志向の生き方は、小学4年生、中学生および高校生の間には有意差はみられないが、小学6年生で肯定する度合いが有意に低い。不平等の生き方についてみると、学年の進行に従って顕著な減少傾向がみられる。学年進行に伴い女性が自らを蔑視するような生き方を否定する度合いが高くなる。3つの生き方の評定幅に注目してみると、最低は小学4年生で1.3、最高は高校生で2.9と、学年が進行するに従って明らかに増大して行き、望ましいとする生き方とそうでない生き方との差異がより明確になって行く。

つぎに、男性の生き方としてどのような生き方を肯定するかをみる。対等平等の生き方は、小・中学生に比較して高校生の方が有意に高く肯定している。家庭志向の生き方は、小・高校生よりも中学生の方が肯定している。不平等の生き方は、小学6年生と中学生の間には有意差はないが、学年の進行に伴う顕著な減少がみられる。各生き方における評定幅を学年別に比較すると、小学生から高校生にむけて段階的な上昇傾向がみられ、特に、高校生においてその幅が大きくなっている。

さらに、女性であるか、男性であるかによって肯定される生き方がどのように違うかについてみる。まず、対等平等の生き方についてみると、小学生では有意差はみられない。しかし、中・高校生では対等平等の生き方は、女性よりも男性の生き方として肯定されている。また、家庭志向の生き方は、いずれの学年においても男性よりも女性の生き方として肯定されている。不平等の生き方は、中学生では有意差が見られないものの、他のいずれの学年においても女性よりも男性の生き方として否定されている。学年の進行により男性と女性の生き方は、明確に分化する傾向がある。

男性の生き方として対等平等の生き方が望ましいとする場合、それはあくまでも女性との関係において対等平等であることを意味している。それゆえ、先にみたような対等平等の生き方の肯定に性差が存在することは大変奇異なことといえる。このような男女の生き方の違いが何故、女子の方に生じるかについては、さらに検討される必要がある。

(2) 男子について

男子が、女性および男性の生き方についてどのような生き方を「よし」とし、またどのような生き方を「あし」とするかについてみたのが表3である。

女性の生き方としてどのような生き方を肯定するかについてみると、いずれの学年においても対等平等の生き方が最も肯定されている。小学4年生では、家庭志向と不平等の生き方には有意差はみられないが、他の学年ではいずれも家庭志向の生き方の方が不平等の生き方よりも有意に肯定されている。発達的にみると、対等平等の生き方を小学生の方が、中・高校生よりも有意に肯定する傾向がみられる。家庭志向の生き方は、小学6年生と中学生の間に有意差はみられないが、学年の進行により顕著な減少傾向がみられ、女性の生き方として明らかに否定されている。3つの生き方の評定幅に注目してみると、女子にみられたような学年の進行と平行するような一貫した上昇傾向はみられない。

つぎに、男性の生き方についてみる。

いずれの学年においても対等平等の生き方を最も肯定し、ついで家庭志向となり、最も肯定

表3 女性と男性における生き方(男子)

		女性の生き方		男性の生き方		有意差
		平均	SD	平均	SD	
4年 (117人)	対等平等	5.2	1.0	5.2	0.8	
	家庭志向	4.4	0.8	4.2	0.7	**
	不平等	4.5	0.9	3.3	1.0	***
6年 (108人)	対等平等	5.3	0.8	5.3	0.9	
	家庭志向	4.2	0.7	4.0	0.7	*
	不平等	3.9	0.9	3.1	0.9	***
中学生 (146人)	対等平等	4.9	0.7	5.2	0.8	***
	家庭志向	4.7	0.6	4.5	0.8	**
	不平等	3.8	1.0	3.2	1.1	***
高校生 (48人)	対等平等	4.9	0.7	5.2	0.7	**
	家庭志向	4.6	0.5	4.2	0.8	***
	不平等	3.2	0.7	2.7	0.9	***

* p<0.05 ** p<0.01 *** p<0.001

されないのが不平等の生き方である。発達的にみると、対等平等の生き方には有意な学年差はみられない。家庭志向の生き方については、小・高校生に比較して中学生の方が有意に高く肯定している。不平等の生き方は、小学6年生と中学生の間には有意差はないが、学年の進行に連れて顕著な減少がみられ、男性の生き方として否定されている。3つの生き方の評価幅に注目してみると、発達と平行する一貫した上昇傾向がみられる。この傾向は、不平等な生き方が学年の上昇につれ減少することに起因する。

女性の生き方と男性の生き方について比較すると、対等平等の生き方については小学生段階では有意差はみられないが、中・高校生では女性よりも男性の生き方として肯定されている。家庭志向の生き方は、いずれの学年においても男性よりも女性の生き方として肯定されている。不平等の生き方は、女性よりも男性の生き方として否定されている。女子の場合と同様に学年の進行に伴い男女の生き方は、より鮮明に分化してゆく傾向が認められる。

(3) 各学年における男女差

いずれの学年の女子も男子も男性および女性については、対等平等の生き方は男性の生き方とし、家庭志向および不平等の生き方は女性の生き方として明確に区別していることが明らかになる。

ここでは、女性の生き方および男性の生き方における男女差についてみる。まず、女性の生き方における男女差をみると、対等平等の生き方においては、小学校段階では有意な男女差は認められないが、中・高校段階では女子の方が男子よりも女性の生き方として対等平等の生き方を肯定する傾向が認められる。特に、高校段階では有意な男女差が認められる。家庭志向の生き方について、小学6年および高校段階では有意な男女差は認められない。しかし、小学4年生および中学段階において有意な男女差がみられる。前者では女子の方が、後者では男子の方が女性の生き方として家庭志向の生き方を肯定している。

不平等の生き方については、小学4年生と高校段階に有意な男女差がみられる。いずれも女子の方が、女性の生き方として女性を蔑視するような生き方を否定するものが増えている。女性の生き方としてどのような生き方を肯定するかをみると、中・高校段階では女子は男子よりも対等平等の生き方を多く肯定するのに対して、男子は家庭志向および不平等の生き方を女

子よりも多く肯定する傾向が顕著に認められる。つまり、女子は、女性の生き方として非伝統的な生き方を男子よりも肯定するのに対して男子はむしろ伝統的な女性の生き方を肯定する傾向が強く認められる。

つぎに、男性の生き方における男女差をみる。

小・中学校段階のいずれにおいても3つの生き方に有意な男女差はみられない。高校段階では、女子の方が対等平等の生き方を男子よりも男性の生き方として肯定している。また、不平等の生き方についても女子の方が男子よりも男性の生き方として否定している。対等平等と不平等の生き方は、相互に拮抗する価値観を含んでいるが、高校女子は男子よりも男性の生き方として対等平等の生き方を多く望み、かつ男性を蔑視するような生き方を男性より強く否定するということから、女子が男性に対して望む生き方には一貫性が認められる。

このことに関して東⁴⁾は、ニュー・フェミニズムの洗礼は女性のみには作用し、多くの男性の心には及んでいないとして男性と女性における意識の落差が性役割をめぐる男女間の葛藤を増大させるのではないかと懸念を表明している。しかし、対等平等の関係を望んでいる女性の場合も、恋人であれ、結婚相手であれ、特定の相手である男性が伝統的な生き方をよしとし、仮に女性がよしとする生き方と合わない場合でも、夫婦のモデルとして呈示されている夫唱婦隨にならない、女性が自らの生き方を変更することの多いことも指摘されている⁵⁾。勿論、認知的レベルでの対等平等の生き方が、必ずしも行動レベルの生き方と同じものではない。それゆえ、女性の生き方においても男性の生き方においても、男性以上に対等平等の生き方を望んでいる高校段階の女子の考え方が、具体的な生活のレベルにおいて行動化される保障はない。高校段階での女子の性役割行動に関する認知が、その後の生活体験の中でどのように変容するかについてはさらに検討される必要がある。

3. 親子の関連

(1) 女性の生き方について

学校段階別に女性の生き方について、親子の評定値の平均をみたのが表4と5である。

女子の場合は、小学4年生では両親との間に不平等以外の生き方においては顕著な差異はみられない。6年生では父親との差異が顕著になり、中学校段階ではむしろ母親との間に有意差が生じ、高校段階で再び父親との間に有意差を生じている。また、6年生の段階では父親よりも女性の生き方として対等平等の生き方を肯定しながら、一方では不平等の生き方を父親よりも肯定するという矛盾がみられる。高校段階では、対等平等の生き方を肯定すると共に不平等の生き方を否定すると言うように望ましさに一貫性が認められるようになっている。不平等の生き方についてみると、父親とのずれは小学4年生で最大になっている。これは、父親が女性の生き方として不平等の生き方を否定する度合いが強いことに起因している。この差は、学年の進行と共に減少し、中学段階では有意差はなくなるが、高校段階で再び有意差を生じている。しかし、高校段階での差異は、女子のほうが父親よりも女性の生き方として不平等の生き方を否定することによるものであり、小学段階での差異とは意味的に異なっている。母親との差異は、学年の進行と共に減少し、高校段階で有意差が無くなる。対等平等・家庭志向の生き方には、発達的变化に伴う一貫した変化はみられない。

女子と両親の女性の生き方における望ましさの相関をみると、高校段階においてのみ有意な相関が、家庭志向(父親： $r=0.32$ ，母親： $r=0.26$)と不平等(父親： $r=0.19$ ，母親： $r=0.27$)

表4 女性の生き方(女子とその両親)

		女 子		父 親		母 親		有 意 差	
		平 均	SD	平 均	SD	平 均	SD	子-父	子-母
4 年 (64人)	対等平等	5.3	0.7	5.2	0.7	5.4	0.7		
	家庭志向	4.6	0.8	4.6	0.7	4.4	0.6		
	不平等	4.0	0.8	3.1	0.9	2.5	0.8	***	***
6 年 (56人)	対等平等	5.4	0.6	5.1	0.6	5.5	0.6	**	
	家庭志向	4.2	0.8	4.5	0.5	4.3	0.4	**	
	不平等	3.7	0.9	3.2	0.9	2.6	1.0	***	***
中学生 (74人)	対等平等	5.1	0.7	5.1	0.7	5.5	0.6		***
	家庭志向	4.6	0.6	4.6	0.6	4.5	0.6		
	不平等	3.2	0.9	3.2	1.0	2.5	0.9		***
高校生 (129人)	対等平等	5.5	0.7	5.3	0.6	5.5	0.6	***	
	家庭志向	4.5	0.7	4.7	0.6	4.5	0.7	*	
	不平等	2.6	0.9	3.2	0.9	2.7	0.9	***	

(対象数は、子・父・母のデータのそろったものである)

* p<0.0 ** p<0.01 *** p<0.001

にみられる。いずれも伝統的な女性の生き方に有意な相関がみられる。当初、低い学校段階の方に高い相関関係を仮定していたが、結果は異なったものとなる。これは「らしさ」に基づきしつけは、具体的な子どもの性に関係づけてなされやすいのに対して、今回、扱った生き方に関する「らしさ」はしつけよりも抽象的であるため、小・中学生の段階においては相関が低くなった可能性が考えられる。

表5 女性の生き方(男子とその両親)

		男 子		父 親		母 親		有 意 差	
		平 均	SD	平 均	SD	平 均	SD	子-父	子-母
4 年 (55人)	対等平等	5.3	1.0	5.0	0.6	5.5	0.6		
	家庭志向	4.3	0.7	4.5	0.5	4.4	0.7		
	不平等	4.5	1.0	3.0	0.9	2.5	0.9	***	***
6 年 (54人)	対等平等	5.2	0.7	5.2	0.7	5.6	0.7		**
	家庭志向	4.2	0.7	4.6	0.5	4.3	0.6	***	
	不平等	3.9	0.9	3.1	0.9	2.5	1.0	***	***
中学生 (65人)	対等平等	4.9	0.7	5.2	0.6	5.4	0.7	*	***
	家庭志向	4.6	0.6	4.5	0.4	4.4	0.6		**
	不平等	3.5	1.0	3.0	0.9	2.4	1.0	**	***
高校生 (48人)	対等平等	4.9	0.7	5.2	0.5	5.5	0.7	***	***
	家庭志向	4.6	0.5	4.7	0.4	4.6	0.6		
	不平等	3.2	0.7	3.2	0.9	2.8	1.0		**

(対象数は、子・父・母のデータのそろったものである)

* p<0.0 ** p<0.01 *** p<0.001

男子の場合は、小学6年と中学段階で多くの有意差がみられる。対等平等については、学年が進むに連れ両親との差異が増大して行く。しかし、家庭志向についてはそのような一貫した傾向は認められない。不平等については、むしろ学年の進行に伴い親子の差異は減少してゆく傾向がある。これは、男子の方が学年の上昇に連れ、女性の生き方として不平等の生き方を否定する傾向が増大することに起因している。対等平等における母親との差異は学年進行に伴い増大して行き、一貫した変化が認められる。これは、男子が女性の生き方として対等平等の生

き方を肯定する度合いが学年進行に伴い減少することに起因している。父親との差異には、このような一貫した変化は認められない。家庭志向についても発達的な差異はみられない。男子は、学年進行によって両親のいずれよりも、女性の生き方として伝統的な生き方を肯定する傾向が顕著になる。

女性の生き方における男子と両親の相関をみると、小学4年生では対等平等において父親との間にマイナスの有意な相関 ($r=-0.18$) がみられる。また、高校段階においては、家庭志向に父親との間に有意な相関 ($r=0.31$) があり、母親とは対等平等に有意な相関 ($r=0.36$) がみられる。女子の場合とは異なり、両親の性の違いにより異なった生き方との間に有意な相関が認められる。

(2) 男性の生き方について

学校段階別に男性の生き方について、親子の評定値の平均をみたのが表6と7である。

表6 男性の生き方（女子とその両親）

		女 子		父 親		母 親		有 意 差	
		平 均	SD	平 均	SD	平 均	SD	子-父	子-母
4 年 (64人)	対等平等	5.1	0.9	5.5	0.6	5.7	0.6	***	***
	家庭志向	4.1	0.7	4.4	0.5	4.4	0.7	***	**
	不平等	3.3	0.8	2.5	0.8	2.2	0.7	***	***
6 年 (56人)	対等平等	5.4	0.7	5.3	0.7	5.7	0.7	***	***
	家庭志向	3.9	0.6	4.3	0.5	4.5	0.6	***	***
	不平等	3.0	0.9	2.7	0.7	2.5	0.9	*	***
中学生 (74人)	対等平等	5.3	0.7	5.4	0.8	5.7	0.7		***
	家庭志向	4.4	0.7	4.4	0.8	4.4	0.7		
	不平等	2.9	0.9	2.6	0.9	2.4	0.9	*	***
高校生 (129人)	対等平等	5.7	0.7	5.5	0.6	5.7	0.6	***	
	家庭志向	4.2	0.6	4.1	0.7	4.1	0.6		
	不平等	2.4	0.7	2.5	0.8	2.3	0.9		

(対象数は、子・父・母のデータのそろったものである)

* $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

女子と両親との差異は、小学校段階で多くみられるが、学年が進行するに連れ減少する傾向が認められる。対等平等の生き方は、母親とでは学年の進行に伴い減少する傾向が顕著に認められる。しかし、父親とでは小学4年生でみられた差異が、小学6年・中学校段階ではみられなくなり、高校段階で再び有意差がみられる。小学4年生の差異は、父親の方が男性の生き方として対等平等の生き方をより肯定することに起因している。しかし、高校段階の差異は、男子の方が父親よりも対等平等の生き方をより肯定することによるものであり、差異の意味が異なっている。不平等の生き方における両親との差異は、学年の進行に伴い明らかに減少して行く。この減少は、男子が男性の生き方として不平等の生き方を否定する傾向が、学年の進行に伴って顕著になることに起因している。

相関関係をみると、高校段階においてのみ有意な相関がみられる。父親との間では不平等な生き方において ($r=0.19$)、母親との間には対等平等な生き方において ($r=0.19$) 有意な相関がある。

男子と両親との差異は、いずれの学校段階でもみられるが、小学段階でより多くみられる。対等平等の生き方における父親との差異には、発達的な一貫した変化は認められない。母親と

はいずれの学校段階においてもほぼ一定した差異が存在し、母親の方が男性の生き方として対等平等の生き方をより肯定的に考えている。不平等の生き方についてみると、いずれの学校段階においても両親の方が、この生き方を否定する傾向が強くみられる。しかし、その差異は、学年の進行に伴い減少する。これは、男子が学年進行に伴って男性の生き方として、この生き方を否定するようになることに起因している。

両親との相関は、小学6年にのみ有意な相関がみられ、父親とでは不平等な生き方において ($r=0.21$)、母親とでは対等平等の生き方において有意 ($r=0.21$) となっている。

男子の場合と女子の場合では、親との有意な相関に違いがみられる。このような違いは、例えば、性役割の型づけは女子よりも男子に対して早期に強くなされるとの指摘⁶⁾との関連が考えられる。

表7 男性の生き方 (男子とその両親)

		男 子		父 親		母 親		有 意 差	
		平 均	SD	平 均	SD	平 均	SD	子-父	子-母
4 年 (55人)	対等平等	5.3	0.8	5.3	0.6	5.7	0.6		***
	家庭志向	4.2	0.6	4.4	0.5	4.5	0.6		*
	不平等	3.2	0.7	2.5	0.7	2.1	0.7	***	***
6 年 (54人)	対等平等	5.2	0.8	5.7	0.6	5.8	0.7	***	***
	家庭志向	4.0	0.7	4.3	0.6	4.4	0.7	**	***
	不平等	3.0	0.8	2.3	0.8	2.3	0.9	***	***
中学生 (65人)	対等平等	5.2	0.8	5.4	0.7	5.7	0.7		***
	家庭志向	4.4	0.6	4.3	0.6	4.4	0.6		
	不平等	3.0	0.9	2.5	0.8	2.3	0.9	***	***
高校生 (48人)	対等平等	5.2	0.7	5.7	0.5	5.8	0.6	***	***
	家庭志向	4.2	0.8	4.1	0.8	4.2	0.6		
	不平等	2.7	0.9	2.3	1.0	2.3	0.9		

(対象数は、子・父・母のデータのそろったものである)

* $p < 0.0$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

4. おわりに

女性と男性の生き方に関する考え方の1つに、二分論的な考え方がある。この立場をとるものに、例えば、パーソンズ⁷⁾がある。彼は、男性の役割として手段的役割を、女性の役割として表出的役割を仮定している。前者の役割では、家族を養うために収入を伴う仕事につくことが重要なことであり、生きる場は外(社会)にある。後者の場合には、家族員の緊張を緩和したり、相互の関係を調整することが重要な役割であり、生きる場が内(家庭)にある。しかしながら、手段的役割と表出的役割が、お互いに背反的な関係として個人の中にあるものであるかどうかには疑問がある。現代のように家事が、機械化も社会化もされていない時代には、物理的にこれら2つの役割を同一個人が担うことは不可能であったことは十分に考えられる。その様な状況でなされていた役割分担が、社会機構の変化と関わりなく、恒久性を持つものではないことは容易に指摘できる。事実、パーソンズもこれらの役割の分担は、生物学的基盤から派生したものではなく、社会状況がその役割を規定するという立場に立っている。

総理府の調査⁸⁾により、「男は外、女は内」という性役割行動を肯定する比率の推移をみると、昭和47年は83%、昭和54年は70%、昭和59年は71%となっている。昭和59年の結果は、国際比較を意図して調査がなされたものであり、諸外国の結果をみると、フィリッピン56%、アメリカ34%、スウェーデン14%、西ドイツ33%、イギリス26%であり、日本の比率の高さが目立つ。この後、日本では女性の働く場の整備も図られたため、この比率の減少は十分に考えられるが、他の諸国との差異が解消されているとは考え難い。このような男女の役割分担と根を同じくするものに、子どものしつけにおける「らしさ」の重視がある。やはり、総理府の調査でみると、「らしさ」を肯定する比率は、昭和47年は75%、昭和54年は69%、昭和59年は63%となっている。昭和59年の国際比較の結果をみると、フィリッピン28%、アメリカ31%、スウェーデン6%、西ドイツ20%、イギリス20%であり、ここでも日本の比率の高さが目につく。このように、日本の社会にあっては「男は外、女は内」という性役割行動は、子どものしつけの段階から既に方向づけがなされていることを示している。

ところで、「らしさ」にかかわる発達の性的型づけについてみると、男児の方が女兒よりも強い型づけをうけることが指摘されている。特に、その場合に男性役割が女性役割よりも価値的に優れているために、男児は男性役割から逸脱し、女性役割に抵触することを戒める内発的動機づけを持つとされている⁹⁾。このことから男子にとっては男性の生き方としては伝統的な生き方が固定化されやすく、また、その対比となる女性の生き方に対してもつ男性の考え方も伝統的なものに固定化されやすくなることが考えられる。一方、女子の場合には、本結果でも非伝統的な生き方が女性の生き方として肯定されているが、これは、先に指摘したような家事を取り巻く事情の近代化に伴って、家事への専従度が減少したこともあり、役割的に優れたものとされている男性的役割の取り込みが容易になっている状況との関連が考えられる。

特に、本調査で対象とした女子高校生は、女性の生き方としても男性の生き方としても、対等平等の生き方を肯定する度合いが高かったが、この様な考え方はその後の人生において継承される可能性の低さが指摘されている¹⁰⁾。実際の生活のレベルで対等平等の生き方を堅持することは、その当事者にとっては非常なエネルギーを必要とすることによる。例えば、理想的な夫婦のモデルとして、夫唱婦随あるいは夫婦は一心同体などという表現がなされるが、この場合、従うのは妻である女性の方であり、また夫である男性のなし遂げたことを、我がこととして妻である女性が満足を感じるのが後者の生き方である。このような理想的な夫婦像として呈示されている伝統的な生き方を自己の中に取り込む方が、女性が自ら望む生き方である対等平等の生き方を生きるよりも葛藤が少なくすむ。このことは、たとえ本結果に見られたように認知的に対等平等の生き方が望ましいとされても、それが実行されがたい現実があることを示している。

観念的变化だけでなく、行動レベルでの実行化のための1つの方策としては、総理府の調査でも指摘されているように、女性自身が知識や技術力をつけるための具体的な場が教育制度の中に確立される必要があるだろう。さらに、日常的に性役割として男女が相互補完関係において行っている役割を性に固定化することなく、個人の中に時と場により可塑性をもつように確立するための行動レベルに通じるような教育的配慮が必要となろう。また、女性が自らの生き方を放棄する要因として、就労に関する経済的な男女格差の問題が大きいことを考慮すれば、人間のライフサイクルを視野に入れた具体的な方策が、対等平等な生き方を男女に確立するために必要となろう。

調査に御協力戴いた長野市立三輪小学校，古里小学校，東北中学校，東部中学校，長野県立西高等学校，東高等学校の児童・生徒の皆さんとそこご両親，そして調査の機会を与えて下さいました校長先生とクラス担任の諸先生に衷心より感謝申し上げます。

なお，資料の集計・分析には JEPS を使用した。

注

- 1) 大瀧ミドリ他 青年期の親子における性役割認知のずれ 上越教育大学研究紀要 8, 3, 115-128, 1989
- 2) 鹿内啓子他 女子大生の社会的・職業的役割意識の形成過程に関する研究 名古屋大学教育学部紀要 29, 101-135, 1982
- 3) 前掲書 1)
- 4) 東 清和他 「性役割の心理」 大日本図書 1982
- 5) 前掲書 4)
- 6) 東 清和他 「性差の発達心理」 大日本図書 1982
- 7) パーソンズ他 橋爪貞雄他訳 「家族」 黎明書房 1981
- 8) 総理府婦人問題担当室監修 「婦人の生活と意識」 ぎょうせい 1984
- 9) 前掲書 6)
- 10) 前掲書 4)

Social-Role Cognition of Children and Their Parents

Midori OTAKI and Rie KONDOU

ABSTRACT

There were two purposes in this study : the one was to find out the social-role cognition change along with the children's age and the other was to find out the correlation between the parent's cognition and the children's.

The subjects were 719 students, including 371 boys and 348 girls, from the 4th grades to the 11th grades, plus their parents. The survey consisted of 62 questions : 31 regarding social-role cognition for women and 31 regarding social-role cognition for men. We asked them to answer the questions using a 7-point scale.

The results were summarized as follows :

1. Three factors were obtained regarding social-role cognition : "equality", "family life orientation" and "inequality".
2. Both boys and girls in junior and senior high school have clearer social-role differences between men and women than those in elementary school.
3. There is a significant difference between boys and girls in junior and senior high school regarding women's social-role, however significant differences regarding the men's social-role between boys and girls can be seen only among senior high school students.
4. There is more significant correlation between senior high school girls and their parents than senior high school boys and their parents.